

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

現代和服の変貌：
その設計と着装技術の方向に関して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大丸, 弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004542

現代和服の変貌

——その設計と着装技術の方向に関して——

大 丸 弘*

La métamorphose du Kimono et la signification du style d'aujourd'hui

A propos du Kimono d'aujourd'hui, j'ai fait une analyse de la méthode du port de ce costume d'une part, et de la technique de la fabrication d'autre part.

Le Kimono d'aujourd'hui considéré par la plupart des japonais comme costume national présenté quelques problèmes difficiles à résoudre.

Un de ces problèmes, c'est que maintenant on ne peut pas le porter simplement: c'est un vêtement peu commode et peu adapté à la vie moderne.

Pour le porter avec élégance, beaucoup d'inventions et d'artifices sont nécessaires, par exemple: nombreux lacets, boutons pressions ou autres pour ajuster le vêtement à la ligne du corps; sans parler du fait que le Kimono se desserre facilement.

En second lieu, il est nécessaire d'apporter beaucoup de soins à la couture du Kimono pour adapter la coupe en ligne droite aux formes arrondies du corps.

Ces efforts montrent que l'on européanise le Kimono sans en changer la coupe.

Evidemment le Kimono d'aujourd'hui se défend d'appartenir au domaine occidental, mais il y a tout de même une grande différence comparée au Kimono d'il y a un siècle.

Le Kimono dans la seconde moitié du 19ème siècle était vraiment grand pour la constitution de la japonaise de ce temps-là: c'est une particularité qu'on retrouve dans la draperie de la toga romaine.

Par conséquent, il fallait remonter, tirer le vêtement, à la mani-

* 国立民族学博物館第5研究部

ère d'une draperie, créant ainsi de larges plis qu'il convenait d'arranger harmonieusement suivant des méthodes variées.

Ainsi, par exemple, tirait-on sur le Kimono au-dessus du Obi, échantonnant largement la poitrine. Grâce à cette utilisation en draperies, on pouvait refaire le Kimono plusieurs fois et s'habiller ainsi économiquement.

Il fallait acquérir une grande habileté pour s'habiller avec élégance bien sûr, mais aussi pour le fabriquer afin qu'il réponde aux impératifs de la beauté.

Aujourd'hui la plupart des conditions sociales et morales qui poussaient les femmes à porter ce costume en ce temps-là ont disparu.

Par conséquent, le Kimono d'aujourd'hui se situe au début d'un nouveau style de costume adapté aux nouvelles conditions sociales et morales du Japon.

I. 本稿の目的	2. 横の方向
II. 前提——現代和服の研究状況の概観	IV. 19世紀後半と比較しての現代和服
1. 着付けの学習	1. 着付けの学習への批判
2. 体形への適合のための設計	2. 体形への適合のための設計への批判
III. 19世紀後半における和服の構造	3. 現代和服の形成プロセスに関するメモ
1. 縦の方向	V. 研究方法について

I. 本稿の目的

和服については、一時的な流行や、趣味の範囲にふくまれる模様や袂の長さといった末梢的部分を除けば、その基本的構造はほぼ不変のもの、あるいは完成したものとみる見方がある。このような見方は、一般に民族服といわれるものに共通しているのであるが、本稿では和服の事例をとりあげて、様式上の変化がほとんど停止したともみられる最近の一世紀が、和服の構造的展開のなかでどのような過程であるのか、またその完成とはどのような内容であるのかを、“二つの和服”の比較にもとづいて検討したい。

Ⅱ．前提——現代和服の研究状況の概観

和服はほぼ完成したものだという観念のある一方で、それを着ることも縫うこともそれほど手易いことではなく、かなりの熟練や細部的な工夫、また研究の余地がのこされているという自覚は、和服に関係する人のほとんどがいだいている。それらの研究課題は、着装に関するものと、製作のための設計に関するものとに区別できるが、いうまでもなくこのふたつは楯の両面にすぎない。しかし現実には、後者は大学の家政学の分野としてともあれ工学的な方法のもとに研究がすすめられているのにたいし、前者は町の発明家や着付け教室の手に委ねられることが多く、おたがいのあいだには必ずしも十分な交流があるとはいいいにくい。したがって本稿でも、そのふたつの面から現状を展望することにした。

1. 着付けの学習

和服の着付けがむずかしいのは、平面的な構造の衣服を、複雑な曲面のからだに巻いて固定するという、基本的な矛盾にねざしているという。ドレーパリー系の衣服でも肩で吊る型式であると着付けたいは比較的容易であるのにたいして、体幹に巻いて締める方法をとるラップ型式の衣服は、同様の課題をもっていることになる。

和服関係者が一般に指摘するのは、日本の若い女性の体型が、その点でより和服むきでない方向に変化しているという事実である。それに加えて、生活様式の全般にわたる変化も、昔風の着付けでは着くずれが生じやすいような悪条件をうんだ。下穿きの常用もそのなかの、もっともはっきりした例のひとつであるとされる [F]¹⁾。

着付けの学習が目的とするよい着付けとは——うつくしく着るという最終的な目標はべつとして——具体的には、着くずれしないこと、からだを締めつけないこと、そして時間をかけずに簡単に着ること、などがそのおもな内容である。

過去一世紀の和服着装上のもっともいちじるしい innovation は、これらの目的を達するための小物類の使用であって、その機能は巻きつけた布を固定することと、体形を円筒にちかづける補正とにつきていえる。後者はからだの方から、衣服構造の単純さに順応したものである [赤星・中橋 1972]。

1) [A]～[H] は情報提供者の記号である。氏名その他のリストは793頁に掲載。

2. 体形への適合のための設計

近世末期までの和服の裁断法は、いわば不定裁断法とでも名づけるべきもので、着用者の体形や大きさについての顧慮はまことに乏しかった。1690年刊の『裁物秘伝抄』以後、十数種の裁縫書、あるいはそれに類するものが残されているのであるが、これらに共通するのは、与えられたまちまちの幅と長さの反物をば、いかに出切をすくなく、有効に利用するかに主要な関心がむけられていることである【岡野 1969, 1971】。19世紀末には、文献的にも、いわゆる標準寸法の使用が定着しているので、以下現在用いられている裁断法（とくに寸法のきめかた）を発展的に要約することによって、平らな布を曲面体に適合させるための思想を概観する。

標準寸法（普通寸法）

たとえば本裁女物単衣であれば、背丈は何センチメートルというように、標準となる寸法表があり、着用者の体格に応じてのあるていどの配慮がこれに加わるのである。学校教育の普及のために、標準寸法は全国的に画一化し、戦前はほとんど変化がなかったようであるが、仕立業者のなかには学校仕上とはちがう独自の寸法表をもって、評判のよい着物を縫うという人もあったようである【C】。

割 出 法

基準となるからだのある部分を実測し、これに一定の係数を乗じて各部分の寸法を得るのが割出法である。『裁物秘伝抄』の“相応裁”がすでにこの考えかたにもとづいていて、割出法は標準寸法の求めかたのひとつというべきであろう。

実 測 法

個々の体形への適合のためには、からだの必要な部分を実測し、それによって裁断するという、西洋服の採寸とおなじ発想である。ある意味では自然な発想ではあるが、和服が直線裁である以上、曲面を実測して平面を適合させるという矛盾を犯すことになり、また和服独特のくつろぎを生かす意味からも、この方法の適用されているのはごくかぎられた部分である。

曲 線 裁 断

体形の、とくに曲面的な箇所の裁断や縫製については、経験的にそこにいくらかのまみをもたせるような技術が、よい仕立てとして行われてきた。ある仕立業者は、衿付けが非常に上手であるという評判があった。当人は、その技術をひとには教えようとしなかったのだが、なんとかききだしたところによると、衽下りの衿付け線が一種の曲線になるようにするということであつた【A】。実はこの方法は、現在ではすで

に学問的に解明されている〔菊池 1974〕。また揚線越にくらべて切線越の方が、線越を切り込んで肩山から曲線で結べるため美しい衿の線をだせるなど〔古川・堀 1975〕、とくに曲面的な構造的配慮を要求される衿肩まわりの設計には、西洋服系の技術の生かされる余地が多い。

和服の曲線裁断については、戦後、大塚末子の研究が一般に知られているが、部分的な応用の歴史は必ずしもあたらしいものではない。衿肩まわり以外でもすでに1925年に、「洋服の仕立て方が応用してあるから、腰がびったりと締め裾さばきがよく」〔尾崎 1925: 68〕というような主張がみられる。

Ⅲ. 19世紀後半における和服の構造

1. 縦 の 方 向

近世末期には一般に曳裾とはしよりの習慣がなりたっているもので、衣服の丈についての思慮は乏しかったとおもわれる。袖丈のような、年令や身分でまたその時々によってちがいのある部分はべつとして、布の利用できる面積は使いきるという態度がふつうだった。1920年代の末でも、「身たけ いっぱい」といった寸法の記注法が散見できる〔渡辺・佐伯 1928: 128〕。当然これにたいする批判があった。「布地のありだけで仕立上げることが、普通仕立として一般の風習になってゐるやうであるが、これは却っておかしな事で」〔尾崎 1924: 252〕、「裁方については今迄布につかはれてゐるやうですが、今後は布をつかって行かねばならぬと思ひます。例へば単長着を作るにしても、今迄は着る人の身長肥瘠などは先ず第二として、此の一反の反物は幾糎あるから袖丈身丈其他を幾糎に裁てば丁度よいといふので裁切てまゐります為、時には人によってお端折が多すぎたり少なすぎたりして、着具合がよくなかったり見にくかったりしたのです」〔成田 1938: 78-79〕。また1900年と1956年とでは、20才の女子の場合身長で 8.2 cm、胸囲で 3.2 cm の差があるにもかかわらず、その間の和裁指導書25冊における標準寸法が、ほぼおなじであるという矛盾の指摘もある〔吉田 1959〕。(ただし近年はかつての四尺裁というようなゆとりのない標準寸法はくずれつつあり、身丈であれば 150-160 cm ていどの幅をもたせ、あるいは部分的に実測する方法が一般化した)。

19世紀に製作・着用された衣服の、原形を変更していない遺品としては、京都市の壬生寺に保存されている古衣裳がよい資料である。和服は年ごとに洗い張りをして縫

い直されるのが常態であったから、古くから伝わっている衣服であっても、仕立おろしの当時と現在の状態とがかならずしも同一ではない。その点壬生寺の古衣裳は、故人の冥福をねがうため納められたものを保存しているので、在銘の衣服はその時代の様式をよく伝えているとみてよい。さて1772年から1911年までの銘文をもつ、留袖の女物長着 51点の寸法は、小西瑛子・稻城信子の計測によれば表1のとおりである[元興寺仏教民俗資料研究所 1973]。すでにのべたとおり、近世は不定裁断法の時代であったので、身丈はたいへんまちまちであるが、全体としてみると4尺、すなわち150 cm を超えるものの方が多い。これらのほとんどが晴着ということもあって、小柄であった当時の女性たちとしては、きわめて大きな量の布を、室内では足もとにまつわらせ、外出には抱きかかえて生活していたことになる。はしりを発生的にみれば、曳裾の小袖の、外出の際の temporary な処理法であった[大丸 1970: 158-160]。19世紀末までは、中流以上の家庭での曳裾は常態であった。1910年代でも、Hの記憶によると、嫁ぎさきの姑は正月には裾を曳いていて、実家の母がそうでなかったのは、子供の多いせいだったそうである。

長い裾をひきあげる方法はいろいろあるが、a) 搔取り、b) 裾からげ、c) 端折りの三つの基本的なタイプと、その中間的な、もしくは組合わせ型があった。そのうちここでは、とくに b) の裾からげについて分析するが、そのまえにこれらの呼称に

表1 壬生寺古衣裳のうち1772～1911在銘の留袖女物長着寸法表

No	袖巾	衿	身丈	No	袖巾	衿	身丈	No	袖巾	衿	身丈
1	31.5	60	150	18	31	62	157	35	32	64	156
2	32.5	64	157	19	32	64.5	158	36	32	63	162
3	40	62	168	20	30.5	60	154	37	31.5	62	146
4	32	60	169	21	32.5	64	151	38	32	62	146
5	32	62.5	153	22	32	61	145	39	30	62	137
6	31.5	61.5	140	23	31.5	61	153	40	32	63.5	157
7	33	61	159	24	31	61	155	41	32	62	146
8	30.5	59	158.5	25	30.5	61	161	42	31.5	65	147
9	31	60.5	159.5	26	31	62	142	43	30	61	144.5
10	31	60	149	27	32	64	156	44	30	61	151
11	31	65	155	28	31	63	151	45	29.5	61	155
12	34	64	161	29	32	63	172	46	30.5	61	145.5
13	44.5	65	152	30	33.5	61	157	47	32	63.5	153
14	32	61	144	31	29	56	148	48	32	61.5	144
15	29	60	145	32	29	61	155	49	28	54	136
16	31	61.5	151	33	34.5	66	164	50	31	60.5	161.5
17	32	62	141	34	32.5	62	142	51	30	62	147

『壬生寺民俗資料緊急調査報告書』にもとづいて作成



写真1 家庭での曳裾 (1892)

ついて整理したい。c)の端折りは、上前下前の襟先を折りあげて、帯に挟む方法である。厳密に言えばこの方法は、長裾をひきあげるために行うものではなく、男の着物や、女性であれば俄かの雨降りや汐干狩などに、とくに裾の濡れるのをふせぐためにする、いわゆる尻はしよりである。それにたいし b) の方を、今日一般にはおはしよりとよぶ。けれども b) の中には、現代式のおはしよりとは多少違うやりかたのものもふくまれている。こうした理由から、呼称の交錯はどちらにしても避けられないので、b) に属する方法をほんらいの字義にしたがって、ここでは裾からげとよぶことにする。

さて、b) のうち、腰のまわりでゆとりの部分を畳み、その外に帯を締める現代風のいわゆるおはしよりは、すでに維新前から、長裾の処理のもっともふつうの方法になっている。ただし、現代のように、腰に一定の幅の紙を巻いたように平面的な状態になったのは、せいぜいこの半世紀以内のことであるらしい(写真2, 3)。とりわけ寒い季節には、19世紀



写真2 はしよりのゆるやかさの例。兵庫県下の豪商の妻と娘 (1880年代末)



写真3 はしりと、ゆるい衿もとの例。
滋賀県の商家の人々 (1884)

には綿入れの重ね着が多かったので、腰の周囲はずいぶん重い印象になったであろう。

また当時は上前の打合せが浅く、ときには中央にちかいところに棲のきている例さえある (写真4左の女性)。かつ、その合わせめを、つよくひきあげて着る好みがあった (写真5)。そのために着物のうしろ裾を踵で踏んで、前をぐいと引きあげて着るような着かたがあったそうである [H]。この結果当時の着物は下半身に、正面観では写真6のような、背面観では写真7のような、斜めの深いひだを、佇んでいる状態でも生ずることになる。写真8は同様の着付けの実験例である。現代風の着付けであると、こう



写真4 左の女性は裾の打合せが、膝と膝の半ばあたりになっている。かの女は長野県内の豪農の妻女である。右の女性の坐りかたに注意。また、袖のひだは、衿を大きく抜いたための、つれひだであろう (1884)



写真5 裾の右側をひきあげて着る風習 (1889)

したひだは静止状態ではけっしてあらわれない。

縦襷による腰部の縦の線の構成は、当時のヨーロッパ人には、つよい印象を与えたとみえ、シュトラッツはこれを、腰の張りだしているのを隠し、短い脚から眼を逸ら



写真6 前裾にあらわれる斜めのひだ (1890年代)



写真7 後裾にあらわれる斜めのひだ (1890年代)



写真8 裾にあらわれる斜めひだの実験



写真9 はしりのみえない着付け。胸もとのたるみに注意（年代不詳）

させるための工夫であると考えた〔シュトラッツ 1902: 311〕。

横の線を隠し、腰をほっそりと見せるためであれば、当時一方で行われていたたっぷりしたおはしりは目障りであろう。ヨーロッパ人の眼には、室内における曳裾の女性の印象がよかったのかもしれない。しかしまた写真9のような着装法もある。この方法を仮にb-2法とよぶ。これは胸もとに十分なたるみを取り、それに対して腰の折りかえしはごく僅かか、全くなくてもよい。帯は折りかえしを覆うように締め、もし裾を曳くようであれば、帯の内側にひきあげてつつ込む。こうして帯を除けば横の流れはなくなるのであるが、その帯も当時のひとつの方法であった斜めに交叉するような結びかたをすれば、全体はすべて緩やかな斜線で構成される。この着装法は当時としてもけっして多くはないが、たとえば周延の描いた「鹿鳴館貴婦人慈善会図」（1884）をみると、この方法が、ある一時期の流行であったとしても、中流以上の階層の女性に、かなりひろく行われていたことを推測できる（写真10）。写真11はその実験例である。

長すぎる衣服丈をつめる手段としては、縫い込みや、揚げも行われた。縫い込みの

多いのは和服縫製の特色のひとつであるが、出切れを惜しむことや、縫い直しの際への配慮として、なされたものである。



写真10 帯の下にはしよりの認められない着かたの女性たち (1884)。
周延「鹿鳴館貴婦人慈善会図」部分

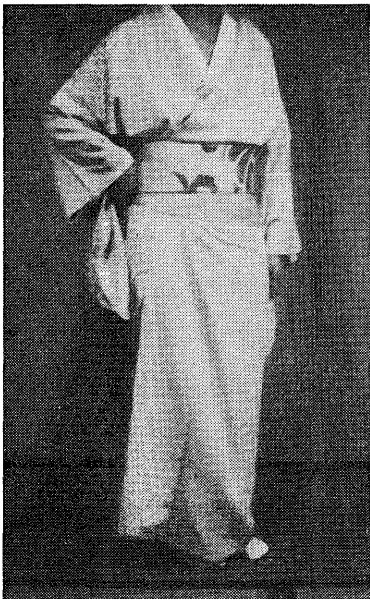


写真11 B-2型の着装実験例



写真12 あげをした袴をはく10才の少女。
岡山県の小学校 (1902)



写真13 肩に一種のあげをもつ着物の
母親 (1898)



写真14 肩にあげらしいものの認められる新
妻の着物 (1889頃)

揚げは現代和服にも、やや形式化して残っている。揚げをとくにするのはいうまでもなく子供であって、あるいは洋装のスカートの frill の真似かもしれないが、袴に
なん段かのあげをする風習もあった (写真12)。縦の方向ではないが肩揚げは、娘ざ
かりの女性にさえごくふつうのことであった。稀には既婚の女性にさえその例があり
(写真13,14)、いかに早婚の時代とはいえ、われわれの理解している肩揚げとは、べ
つ認識が当時にはあったとも考えられる。

2. 横 の 方 向

縦の方向にゆとりがあれば、それはまた横へのゆとりともなるのであるが、ここで
はとくに、衿と衿肩あきについて検討する。

近世末までに、袖幅より肩幅の方がいくぶん短めという比率が定着した。和服の肩
幅は人の肩幅よりかなり長いので、袖付けは二の腕の半ばあたりに及ぶことになり、
いわゆるキモノ・スリーブの外観を呈する。身幅は19世紀中は、関西仕立は関東仕立
より広くとるのがふつうで [篠田 1893: 34; 中嶋 1892b: 98], この習慣は一部
では戦前までつづいた。おそらく、より古い裁断法が、上方にはのこったものと思わ
れるが、関東人の眼からみると、格好も悪く、身幅が広ければ、歩きにくいというふ

うに考えられた [E]。

長着の肩幅は約 30 cm ずつあって、すでにのべたように、袖付けが腕にかかるきわめてゆい仕立てである。和服の肩幅は肩の幅というより布の幅なのである。したがって袖付けと肩峰点とは無関係で、そこにきわめて自由な、着付けの表現の可能性がある。實際上、おなじ形の衣服を、あるときは衿もとをつめて着、あるときは肩を外して着るというような着かたを、古代の桂以来、日本人は行ってきた。ただし全体としてみるなら、このような容量の大きい衣服を、比較的衿肩あきのひろい状態で着ることを、好んだといえる。

近世における女小袖の着装法の変化として、前期はふところをたるめて着、後期は衿をぬいて着る習慣のあったことが知られているが、前にせよ後にせよ、それだけのゆとりを、衿肩あきにつねにもっていたことは、前提として念頭におく必要があろう。

周知のとおり、ふところをたるめることと、衿をぬくことを時代的好尚のうつりかわりとして、その原因を髪型の変化におく意見が、一般に行われている。しかしこの点については、もう少し検討の余地があるのではないだろうか。当面問題としている時代からは、少々遡った例になるが、写真15は吉原の大夫の盛装であり、写真16は茶屋女である。胸もとをくつろげて、乳のあたりに十分なたるみをとった後者の着付けは、19世紀後半の女性の標準的なふだん着と、基本的にはすこしもちがうところは



写真15 極端な抜衿をした遊女の盛装。
歌麿「鶴屋内篠原」



写真16 胸もとをくつろげている下町風の着付け。歌麿「難波屋お北」

ない。すなわち、ふところをゆるめて着る着かたは、時代様式であるなし以前の事実として、より自然で、楽で、より生活的な着装法なのである。

衿肩あきをゆるく、胸をたるめて着る着かたは、ひとつにはまえに触れた裾からげの方法とも関連するはずである。とくに腰で畳んだ部分、いわゆるおはし[・]ょ[・]り[・]を見せないような着付け（b-2 法、写真9）の場合は、胸もとに非常にたっぷりしたたるみをとるように、腰紐なり帯なりで、下から押しあげるようにして着付けることになる。

ふところをくつろげた着かたの原因のひとつとして、姿勢の問題をつぎにとりあげよう。19世紀後半の日本人、とくに女性の姿勢に言及した記録として、Pierre Loti (Louis Marie Julien Viaud, 1850-1923) の観察がある。

「帰りの坂道をおりる段になると、オカネ・サンは弟をふたたび背中にくくりつけ、その重みの下で庶民の女みたいに (*comme une femme du peuple*) 腰を曲げて帰ってゆく」[ロチ 1885: 72]。

「人形のように愛くるしいこの顔、滑らかでうわぐすりをかけたような漆黒のこの美しい髪、しとやかなお辞儀のためいつも前屈みになっているこの特殊な物腰」[ロチ 1885: 26]。

「腰を下さない彼女たちは、一日中、真白な量にじかにうずくまり、その不変のポーズで生活のほとんどすべての用を足している」[ロチ 1891: 182]。

「婦人たちは踵を外側にして歩くが、それは風流の問題で、心もち前方に傾く腰は、おそらくお辞儀の乱用の遺伝が原因であろう」[ロチ 1891: 185]。

当時の日本女性と生活を共にした欧米人は少なくないが、海軍士官として各国の女性と接してきたロチは、一種の冷たい距離において日本女性を観察している。しかも彼の文章は、その視覚的印象を、まるで印象派の画家のように、鋭利にとらえている²⁾。

ここで彼が指摘した“庶民の女”の前屈みの姿勢は、たとえば写真17のような独得の風情を、19世紀末の版画にもとどめている。そしてその原因も、おそらくロチの推測がほぼ当たっているであろう。

当時の女性は、かりに椅子に腰をおろしても、うしろにもたれるよりも、ややまえに重心を落しぎみになりやすく、椅子に腰かけるのではなく、椅子のうえにうずくまのような姿勢になりがちである（写真4右）。もし支えがあるならば、背もたれでな

2) ロチの観察の正確さは、かれのもちかえったデッサンをもとに Myrbach, Rossi の描いた『お菊さん』の挿絵が、日本人の目から見ても異和感の少ないものであることから理解できる。船岡氏によれば、ロチのデッサン類は今日5,600点残されているという。また彼の姉 Marie Viaud は、職業的な画家であった。



写真17 市井の女性の標準的ポーズのひとつ (1888)。
梅堂「明治二十歳八月十九
日日食九分九厘余」



写真18 襦袢の衿もとに生ずるやわらかいひだ (1897)

く、前にあった方がよく、しばしば、胸や、ひざを抱くようなポーズが、立った姿にさえも認められる。

このような姿勢の場合、衿もとがひらき、胸がたるみ、その結果前面が非常にゆるんだ、ひだの多い状態になるのは当然である。むしろ逆に、つねに蹲って、前屈みで生活する居住様式であれば、こうしたゆるみは絶対必要なのである。

19世紀後半には、ふところに乳飲児をいれる習慣は一般的には廃れているが、胸を押しあけて授乳することはまだ当りまえのことだった。

今世紀に入って間のない頃、この胸もとのたるみを、なん本かの装飾的なひだとしていれる着付けの流行した時期もあった [E]。

たるみは長着だけでなく、風俗画のなかの襦袢の衿には、はっきりとしわの描かれている例を、認めることがある (写真18)。当時は襦袢の衿は広衿で、一般にいまのような堅い衿芯をいれなかったから、とりわけ胸の貧弱な人は、胸もとがどうしてもたるんだ、という [E]。

こうして、縦の方向も横の方向にも、たっぷりと仕立てられたものを、ゆったりとからだに巻いて着る、ほんらいの意味での wrap することが、当時の人々には立居のなかで自覚されていたことであろう。



写真19 ゆたかなたるみをもった衣服
(19世紀後半)



写真20 左と同じ (1894)

長着という呼称のうまれた事情の示すとおり、貧民の衣服にはひどく丈尺の短いものもあったし、まえにも触れたように上方風にくらべると江戸風は、たとえば前者のばっちと後者の川なみひとつを較べても、いくぶんほそめの仕立てである。しかし全体としてみれば19世紀の後半は、『四時交加』(1798)の世界とそれほどの隔たりはなく、柔らかいものを長めに仕立てて重ね着することが、依然として見栄として行われた時代であった³⁾。

Ⅳ． 19世紀後半と比較しての現代和服

1. 着付けの学習への批判

よい着付けの条件のうち、もっとも重要視されるのは、美しく着るという根本的なことをべつとすれば、いかに着くずれを防ぐか、という問題である。

3) 当時のそうした傾向は、当時の風俗を記録した『怪化百物語』(1876)にも活写されている[福地 1959: 5-6]。

着くずれというものが、具体的にどういう現象であるのかについての分析は少ないが、着用中に、(1) 胸もとがはだける、(2) 裾がひろがる、(3) 帯がゆるむ、または下がる、という点は大体一致し、とくに (1) についての関心がいちじるしくたかい [三浦 1969]。

和服を着る困難さを解消するために、多くの小物類が開発されたが、和服を着慣れた年配の婦人や着付けの専門家たちは、そうしたものに冷淡な傾向がある。素人の老婦人の場合、novelty そのものへの、一種の拒絶反応もあるであろうし、すでに和服むきのからだつきをもっているためでもあろう。一方専門家のなかには、女性の体形の変化は事実だが、昔でも柳腰の女性ばかりだったわけではない、鳩胸出っ尻ということばもあった⁴⁾。むしろ若い人たちが和服を着たときの身のこなしを理解していないこと、またからだを締めることを嫌いすぎることが困るので、それさえなければ、ふつうのからだの人には補正小物の必要はなく、そういうものをあれこれ使えばかえて面倒だ [A] という見方もある。このように、着付け専門家や指導者のなかには、昔ふうの紐だけをういた着付けを主張する人も少なくないのであるが、ただし初心者への着付けの指導の場合には、a) 衿の打合せを固定するための器具、b) ほどこにいくような工夫を施した腰ひも、の 2 点は、とりいれる傾向がある。実験的にも、a) 固定具を使用した場合、相当むりな動作をしても、胸がひらくということはほとんどない。

ところで、この着くずれの問題と取り組んでいる研究者のなかに、着くずれという観念がある程度主観的なものではないかという、疑問をいだく人のあるのは興味ぶかい [鈴木 1976: 30; 三浦 1969: 53]。一般に着くずれや衿肩あきに関連する着装実験においては、人体なりボディなりに着せた衣服の、まえ打合せは頸窩点より何 cm 下、そのほか背中心における頸と衿の上端との離れ寸法、背中心における衿の開角度、肩山における衿の開角度、肩山における頸と衿の離れ寸法といった数値を測定し、動きに伴うずれによって、着くずれの程度を判断する。しかし研究者自身の懐疑にも示されるように、現代の詰衿風和服は、それはひとつの着装法にすぎないともいえる。すなわち、19世紀後半における民衆の、平生の着付けの基準からいえば、さきにあげた着くずれ現象の具体的な内容のうち、(1) および (2) は全く問題にならない。19世紀風の考えかたにたつなら、胸をくつろげて、乳のあたりをたるめて着ること、肩を落しぎみに、袖で手をつつむような着かたが、きものらしい着かたなのである。

4) 現代女性は前世紀に較べれば怒り肩が多いとされるが、撫で肩の体型の方が着くずれを生じやすいという報告がある [三浦 1978; 羽柴 1979]。

この点からいえば、深い打合せを固定するための金具や、ベルト類の利用は、日本の伝統的な着装美から、着くずれの美を奪ったという意味において、重要な innovation であることになる。現代においても、和服教育に長い経験をもつ専門家のなかに、「私は身幅の狭い、窮屈な着物はすきではない。胸もとのたっぷりしたものを、深く打合して着るのがすきだ」[B]という意見の持主もあって、傾聴すべきであろう。

2. 体形への適合のための設計への批判

すでにのべたように、曲面の体形への適合のための、設計上の合理化は、着用者の体格の実測にもとづく、布の曲面的構成の方向が主である。和服の様式上、曲面設計のもっとも微妙な部分は頸まわりであるので、構成学関係の研究の多くはここにあつまっているのであるが、とくに繰越しの導入とその展開は、和服設計上、過去半世紀のもっとも重要な変化であった。

衣服のうしろ衿を縫代の必要以上に縫いこんで付け越すことは、それ自体はあたらしい工夫ではない。しかし長着の衿に、一般に今日のような繰越しをほどこすようになったのは、1920年代から戦後にかけてのことであった。1920年代の代表的な裁縫書にも、羽織を除けば繰越しについての言及はみられず[甲斐 1925; 吉村 1924]、尾崎は1925年の『新しい和服の裁縫』のなかで[尾崎 1925: 85-86]、「衣紋を抜く着物の仕方 1. 縫込（櫛形づけ） 2. 後身頃の揚げ 3. 衿肩明を下げてつける」と、その方法を説明している。Hの記憶によれば、かの女の母親（1932年60才で没）は太っていたので繰越ししていたが、一般には粋すぎるとされた。ただし観劇などに着てゆく晴着には、繰越ししたものがあったという。

Gの場合は、女学校（1914年卒）や家庭では繰越しを教えられなかったが、そのあと浜松市第一の笠井屋呉服店仕立部で三年間縫製を学んでいる間に、覚えたそうである。Dは長崎出身であるが、郷里も東京もかわりなく繰越しは1930年代から、Cは山形の例として一般の人は戦後、ただし50年以前でも芸者は5分、太っている人は7分の繰越しをしたという。これらの繰越しは芸者以外はだいたい揚繰越しであった。したがって19世紀は一般には、繰越しなしで衿をぬいていたのである。

繰越しせずに衿をぬくと、当然の結果として背面がたるみ、八つ口がひらくことになる。うしろのたるみはあるていど帯で隠せるが、八つ口の歪んでひらくのは、袖のつけちがえ——袖付けの前をうしろより余分にとじつける——で修正するしかない。しかしその場合でも、袖から脇の下にかけてたるみが目だつのはふせぎようがない

(写真 4 右の女性)。

なお、繰越しがいくらあったとしても、衿をそれ以上にぬいた場合、肩山の[・]つれの関係等から、着装者は首をやや前に、つきだし気味になる傾向がある。

繰越しなしに衿をぬいたとき生ずる、袖から脇の下にかけてのたるみなど、この種の[・]しわは、昔はだれもそれほど気にはとめなかったものらしい。いまの和服は、衿もとにほんのわずかの[・]しわができて、仕立てが悪いという苦情をもって来る人が多くて困るという [D]。撫で肩の人は胸のあたりに縦じわができやすく、それを苦にしているとなかなくそうとする。[・]しわ自体をなくすことは不可能ではないが、しわのないような着付けをすれば、手のあげさが窮屈になる。着物は着る目的に応じて必要なゆるみをとって着なければならない。そのゆるみがしわであるのだから——縫製が拙劣なための[・]つれのようなものはもちろん別として——しわのない着付けは結局着くずれにつながるのである [A]。

しかし現代和服の設計研究には、直接間接に、いかに布面に[・]たるみや[・]しわを生ぜしめないかという、テーマをめぐるものが多い。衿肩まわりから衿下りまでの部分に生ずるしわの処理について、たとえばある人は衿下りの衿付線を、肩山から 8 cm ていど下がったところで、しわの分量により 0.5–1.0 cm だけ袖付の方へ曲線でいれるとする [菊池 1976]。またべつのある人は肩傾斜角 α 、胸幅 a, b 、それと胸の厚みとの関係を十分考慮して、個人個人にあった曲線を求める必要があるとする [前田 1974]。これにたいし、衣紋をぬいて着ればしわは生じにくいという報告もある [高月 1975: 98]。

また浴衣を着る際のいちばんの苦情は、胸がはだけて困ることなので、抱幅を幾分か広くとった標つけを行う試みもある [川上 1977]。まえがはだけないためには、前合せを深くするのは当然の発想であるが、しかしほんらい浴衣というのは、そんなに胸がきっちり合わなければならないものだったのだろうか。

もちろん、たとえば三つ衿のとじつけ方の不手際とか、適切でない縫いかたから生ずる[・]つれじわのようなものと、たるめて着ることからうまれる[・]ひだとは必ずしもおなじではない。しかし前者の一部の、いわば手技訓練的部分を除けば、しわの性質がなんであるにもせよ、現代和服が、しわやひだの存在そのものに、非常に神経過敏であるとはいえる。

衣服の衿まわりの構造が、人体の頸から肩・胸の凹凸に、fit したかたちで忠実であろうとするならば、着用者のその部分の、正確な計測にもとづけばよいのであるから、むしろ簡単かもしれない。和服の場合、衿山が頸から離れているのが様式上の前



写真21 標準的な現代風の着付け。

提であるので、のぞましい離れかたの基準が必要になる。和装教育においては、“美しい衿もと”というこの基準が、年令や目的に応じての幅はあっても、比較的狭い latitude で存在していて、和服の設計に関する研究は、その与えられた基準を実現するための、技術論なのである。けれどももともと和服じたいは、構造上きわめて大きな 着 装 の latitude をもっているはずなので、ミリメートル単位的设计技術論と、ゆるみのゆたかな、いわば着かたしだいであろうにもなるという、様式上の前提とのあいだには、根本的な発想のずれが横たわるように思える。ともあれ今日の和服の現実、ドレーパリー系衣服としてのゆるみのゆたかさは袖にのこるだけで、体幹部はむしろ

tailoring の方向を志向している。もちろんそれは西洋服装のような、からだそのものに fit した第二の皮膚を作ることではないが、衿山中心は頸筋から 7 cm 離し、長着の打合わせは頸窩点より 4.5 cm 下、襦袢の衿のだしかたは 1.5 cm といった、精密で構築的な構造基準についての考えかたは、皮膚から一定の数値だけ離して仮構された第二の皮膚、ないしは皮膚的壁面、とても表現できよう。

3. 現代和服の形成プロセスに関するメモ

現代和服の形成についての総合的な分析は他の機会に譲るとして、過去百年間の、和服をめぐる多くの変化と、それについての言及から、現代和服の性格を理解する手がかりを得てみたい。

i) 構造上、19世紀和服と較べて現代和服の失ったもっともいちじるしいものは、曳裾であり、また厚い裾綿である。当時は一般に重ね着の習慣があったから、冬期は

相当の厚みのものを身にまといつけ、中流以上の家庭内では大きく衤をだした裾を畳にひいていた。

そののち、和服はほとんど一直線に slim 化の方向を辿った。裾綿だけでなしに、綿いれそのものが廃れたのは、生活の変化にともなう、それなりの機能上の理由があったわけであるが、それと並行して、細身の和服の美学が成立してゆく。1910年に高橋は「都会の婦人の姿は著しくスラリッとしている」のは「都会の仕立は袖幅を広くして、肩幅を狭く、亦た、身幅が地方のに比較して、割合狭くしてあるが故に、肩が頗る小さく見えて、腰と裾がキチンと締り、全体の格恰が甚だしく優美に見える」【高橋 1910: 32】と説き、同じ趣旨を1925年に尾崎は「肩幅は八寸とは定まらない。或る程度まで狭い方が背丈がすらりと見えてスタイルが高尚になる」【尾崎 1925: 69】と書いた。細身化は衿（長着・襦袢とも）幅にも、帯幅にも同様にみられ、その流れは現在もつづいている。こうした好みは、江戸の下町風として、近世末期以降関東は関西に一步先んじていた。E は長野県出身であるが東京で学んだのち、大阪で教壇に立ってこの点に気づき、土地の人に指摘したところ、身幅の狭い着物はお稽古事などのとき、いざるからいけないと言われたそうである。また特に茶道の先生は、裾幅を標準より 2 cm 広くとるという [B]。すなわち畳のうえでの生活では、裾細りの着物は活動的ではないのである。E も、茶羽織が流行した際、すっきり見せるために後幅を 0.8 cm ほど下すばかりにしたが、長い羽織の場合には、それでは動きにくくてだめだったと回顧している。

19世紀風のゆったりした着装法は、今日ではむしろ男性の和服にのこっている。緑越しもはしりもない男性長着の場合——男性のからだといえども、単純な円筒ではないのだから——たるみをたるみとして何処かに残すよりしかたがない。昔風の“ぞろりとした”和服の味は、今日では男の和服の特色となりつつある。

ii) 衣服面のゆるみ——ひだ、ないししわを嫌う現代の傾向については、すでに触れた。この百年の変化のうちで、衿芯の使用、裾の折返し、また帯板の考案などはその方向に添うものであろう。尤もこれを、全体としての衣服の硬直化というふう考えるのは正しくない。たとえば近世、もっとも一般的な素材だった綿織物は、現代の製品と比較すればかなり硬かったとされているし、今日普及しているウール地と比較するならなおさらである。私がここで指摘したい“硬さ”とは、より印象的な意味合いである。19世紀の着装のなかで、部分的にはあるが、今日の和服ときわめて似た外観をもつグループがある。それは屋敷風——武士階級の女性たちの着装法である。ま

た婚礼装束のような正装の場合も、上半身に関しては概して大きな違いがない。19世紀風の着付けの多くが、今日の人々の眼から見て“だらしない”というふうにつつまれるのも、こういう事実と表裏している。襦袢の衿をあまり見せず、衿のまえうしろをつめて着る着かたは、布面の触覚的硬さとはちがう意味で、堅い着付けなのである。こうした着装法は、山の手の屋敷風であると同時に、女学生風の着付けでもあった。現代の若い人たちは、帯の圧迫の苦しさは訴えるが、頸まわりの窮屈さは気にならない。むしろ洋服のハイ・ネックに慣れた人たちは、和服の衿もとを寒いと感じる。

胸をつめて着るという着かたには、後衿も頸すじにつけて着る、現代風の詰衿式の着かたと、うしろは抜衿にする着かたとがある。しかしたとえうしろ衿は大きく抜いたとしても、胸もとが開いていなければ、それはフォーマルな、堅い着付けになる。現代でも、花嫁衣裳のような正装では、袂から合せるふつうの着付けでなく、まず衿もとを整えるのが手順である [A]。

1917年に地方から都会にて結婚した G は、それまで抜衿というものは芸者だけがするものだと思っていたのに、都会ではだれもがしているの、じぶんもするようになった、ところが浴衣の衿まで抜いて着て、ひとに陰口をきかれたと語っている。抜衿は粋であるという以前に、フォーマルな性格であり、仰々しい印象を与えがちなのである。

抜衿を“粋”とする感覚は、この一世紀、和服をいわば職業服として維持し、洗練させた、花柳界からの影響が大きいにちがいない。繰越しも江戸袂も長襦袢も、もともとは娼妓の風俗であった。かの女たちにとってのお座敷着は、客のまえに出る正装なのであるから、衿もとをつめて整え、その代わりに後衿をひいて、そこにゆとりを作ったとも考えられる。

iii) ii) において触れたように、かつては着付けに屋敷風があり、下町風があり、また上方風があり、その上方でも京と大阪とでは大きな隔たりがあったことは『守貞漫稿』の著者の指摘からうかがえる。今日といえども老練な着付け専門家であれば、客にその日の予定を尋ねてから、その目的に適した着付けをするのであるが [A]、着こなしのそのような幅と柔軟性は現代ではふつう失われ、和服のほとんどが晴着という観念もあって、いわば標準着装とでもいうべきものが成り立っている。1930年頃までは丸鬘を結っても、年相応に鬘が小さくなったものだが、戦後は稀に丸鬘を結っている人をみると、20才も40才もおなじ鬘の大きさであるという [A]。鬘のかたちの、年令にふさわしい味わいというものを今日ではほとんどの人が理解できず、丸鬘

であれ嶋田であれ、ある定型化したものを、それと意思こんでいるためであろうか。

和服の場合も、その製作や着装が、学校で教育される状況では当然であろう。そうした標準からはずれた着装なり色や柄は、“趣味”になるという表現で、一種のぜいたくや冒険として別置される傾向がある。

ところで19世紀のもっとも一般的な、という意味は下町風の着装法は、現代の標準的な平装を基準としてみると、“だらしない”とか、“品がわるい”とか、どこか素人らしくないようにとられがちである。実はここに、服装以前の重要な問題がひそんでいるかもしれない。

いうまでもなく、屋敷風と下町風とを、近世末期の和服を考えるうえで、対等のスケールのものとして並置することは、まったく当をえていない。屋敷風などというものは、当時としては特殊なものにすぎないのである。

その下町の、ふつうの女性たちについてロチは、「彼女は着物を脱いで人前に入る不作法について、われわれが抱く基本的観念すら持っていない」[ロチ 1891: 186]と言っている。同様の指摘は、幕末の日本人の生態をロチに較べればかなり好意的に報告している、エメ・アンベールの文章[アンベール 1870b: 111]以後も枚挙にいとまない。からだ、とくに胸をあらわすことについて、当時の女性たちは、それを実見した欧米人や、現代の日本人とは、ちがう意識をもっていたとみなければならない。そしてその意識をかたちづかった要素の中のある部分には、“開化以前”としか言いようのない独自の近世的モラルと、恒常的な貧困とが存在していたことを、考慮のうちにいれなければならないとおもう。

百年の和服の標準化の方向は、ひとつには和服の倫理的向上、正確には、西欧風の倫理的向上のための努力であった。「衿肩明の広いのは下品に見えるものであるから、少し詰加減にする方がよい」[神谷 1931: 101]、「衿を余り頸に巻きつけたるも見悪けれども、殊更に多く、脱ぎさげたるは、甚だ下品なり」[国分 1896: 30]などの例や、1920年代の改革者尾崎芳太郎が、その改良和服の理念を、つねに、“スタイルの高尚さ”においているなど[尾崎 1926: 58, 69]その方向を示唆している。こうした標準化から排除されたものが、衿もとのくつろぎのほか、帯の交叉させた結び様や、変化にとんだ裾からげや端折りであって、そのあるものは今日、舞踊の着付けや花柳界に残るのである。

iv) このような、和服の“向上”のための努力と無関係ではないと考えられる現象として、戦後における和服のイデオロギー化の例を一、二あげて結びとしたい。わが



写真22 19世紀の衣裳を用いた着装実験の状況。民博資料 打掛
標本番号 31998

国の場合、和服教育のシステムが整備され、関連業種をふくめればかなりの規模になる和装業界が、直接間接にこれを支えているため、伝統服装は政治的ではなく、教育的イデオロギーの媒体として、重んぜられる傾向もある。その代表的な例に装道——「装道は愛なり 愛はすべてを生かし 心、言、装、行を美の極に至らしむ」〔山中1972: 36〕および京扇流などがある。

V. 研究方法について

本稿で用いた資料中、文献資料・写真および絵画資料・聴取り資料については、末尾にその出典を示すほか、とくに言うべきことはない。

ところでこの考察のような着装技術論では、上記の如き資料は骨格とはなりえても、胸を落すことによって生ずる脇の下のたるみの状態などという微妙なことがらは、実際に着装してたしかめるより方法がない。ふつう着装実験はできるだけ多くのサンプルをえて、その平均値や数値の分布を求める方法がとられるが、とくに和服の着装では本文中でものべたように、着せかたの許容範囲が非常にひろいうえ、いうまでもなく人体の複雑な凹凸はきわめて個人差の大きいものなので、実験の結果の数値が精密であればあるほど、実際的でないものになりやすい。そこで今回はモデルは2名にかぎり、着かたをいろいろと変化させながら、モデルと着付け手、そして観察者とが、思いつきや想像をまじえて、意見をだしあった。

こうした実験方法によって得られた結論は、まとまりよく整理のできるようながたちにはなりえないが、各種の資料をむすびつける不可欠の要素として、全体を支えているものと信ずる。

聴取りにより資料提供者（出生年）

- A 大丸シヅ ナルミ美容室経営者・神奈川県（1910）
- B 池田富美 関西きもの専門学院々長・大阪府（1917）

- C 伊藤きん 和服仕立業・山形県 (1901)
- D 岩崎藤枝 和服仕立業・長崎県 (1912)
- E 小宮山ふさ 大阪樟蔭女子大学名誉教授〔和服構成学〕・長野県 (1900)
- F 中西正一 装道きもの学院大阪校々長
- G 高橋さだ 静岡県 (1897)
- H 若林 周 兵庫県 (1890)

写 真 出 典

- 1. 中嶋知子『日本の女礼と裁縫』巻下 p. 41
- 2. 若林周氏 (兵庫県) 提供
- 3. 武内せつ氏 (大阪府) 提供
- 4. 小宮山ふさ氏 (大阪府) 提供
- 5. 東陽堂『風俗画報』1889・3
- 6. 平出鏗二郎『東京風俗志』百度詣と垢離取 p. 82
- 7. 同 上 神輿渡御 p. 66
- 9. 毎日新聞社『一億人の昭和史』12, 明治上
- 10. 小西四郎『錦絵幕末明治の歴史』9, p. 95
- 12. 石田典子提供
- 13. 東陽堂『風俗画報』1898・5
- 14. 若林周氏提供
- 17. 野々村慶一氏提供
- 18. 東陽堂『風俗画報』1897・3
- 19. トーアフォート (岡村明吉)『明治ジャパン』12
- 20. 東陽堂『風俗画報』1894・2
- 21. 関西衣生活研究会・東レ K. K. 提供 (以上敬称略)

本稿作成のため、多くの方々から一方ならぬご協力とご好意をえた。聴取資料の提供者や、ここには掲載しなかったたきさんのご家族の秘蔵写真をご貸与くださった方をふくめて、写真提供者の方々にお礼申しあげる。

また『ロチのニッポン日記』の原文その他についてご教示いただいた船岡末利氏、家政大学図書館、および幕末風俗について相談相手になってくださった同僚の守屋毅氏にも感謝したい。

文 献

赤星敏子, 中橋美智子

1972 「和装小物類の身体に及ぼす影響——従来の小物と新装の小物との比較——」『家政学雑誌』 23(7): 481-491。

アンペール, A.

1969a『幕末日本図絵』(上)(1870) 高橋邦太郎訳 雄松堂書店。

1969b『幕末日本図絵』(下)(1870) 高橋邦太郎訳 雄松堂書店。

大丸 弘

1970 「近世における襦衣の研究」『大阪樟蔭女子大学論集』 7: 154-175。

福地重孝

1959 「文明開化期における服装問題——特に女子を中心として見たる——」『和洋女子大学紀要』 4: 1-10。

古川智恵子, 堀 逸子

1975 「衿肩明についての一考察(第1報)——体型とくりこし寸法の関係——」『名古屋女子大学紀要』 21: 93-101。

元興寺仏教民俗資料研究所

1973 『壬生寺民俗資料緊急調査報告書』。

羽柴彰子

1979 「肩傾斜角による着物の動作に関する研究」『京都市政短期大学研究紀要』 18: 152-157。

平出鏗二郎

1972 『東京風俗志』(1902) 風間書房。

今村順子

1916 『三訂 裁縫教授法』 目黒書店, 成美堂書店。

甲斐久子

1925 『新主義を加味せる裁縫教授の理論と実際』 平凡社。

神谷ユキヘ

1931 「和服裁縫」『家事裁縫手芸講座』 玄海堂。

神田和子

1973 「和服寸法に関する考察(第3報)——大裁女物長着の衿肩明き・繰り越し・衽下りの設定について——」『東京家政大学研究紀要』 13: 99-106。

川上公代

1977 「ゆかた——幅関係の寸法, 特に抱き幅について——」『衣生活研究』 32: 40-43。

1978 「大裁女物長 じゅばんについての一考察」『大阪女子学園短期大学紀要』 22: 5-11。

川村キミ子, 永井房子, 藤沢美智子

1973 「和服寸法設定上の考察——長着と下着の衿の関係——」『相模女子大学紀要』 36: 17-32。

菊地秀子

1974 「大裁女物長着の繰越, 衿肩廻りについて」『岩手県立盛岡短期大学研究報告(家政・保育篇)』 25: 103-106。

小池美枝子

1968 「近世における和洋服の衿元の研究(1)——清長作例による美的効果の考察——」『広島女子大学紀要(人文・社会科学)』 3: 73-98。

国分操子

1896 『日本女礼式』 大倉書店。

ロチ, P.

1885 『ロチのニッポン日記』 船岡末利編訳 有隣堂。

1891 「日本の婦人たち」『ロチのニッポン日記』 船岡末利編訳 有隣堂。

前田きよ子

- 1974 「和服のネックラインについての研究——女物長着の衿付け線——」『作陽学園研究紀要』 7(1): 55-63。

三浦美子

- 1969 「和服の着付に関する調査」『大阪薫英女子短期大学研究報告』 4: 49-61。
1972 「和服の着付に関する人間工学的研究(1)——肌着の着くずれに及ぼす影響——」『大阪薫英女子短期大学研究報告』 7: 55-63。
1975a 「体型と着装について」『衣生活研究』 13・14: 80-83。
1975b 「和服の着付に関する人間工学的研究(第3報)——着くずれ率と摩擦係数との相関について——」『大阪薫英女子短期大学研究報告』 10: 103-108。
1978 「和服の着付に関する人間工学的研究(第4報)——肩傾斜角度の着くずれに及ぼす影響——」『大阪薫英女子短期大学研究報告』 13: 115-119。

中嶋知子

- 1892a 『日本の裁縫と女礼』(上) 中近堂。
1892b 『日本の裁縫と女礼』(下) 中近堂。

成田 順

- 1937 『裁縫随想』 大成書院。

岡野和子

- 1969 「近世和裁史の一考察(その二)——江戸中期刊行の裁本について——」『東京家政学院大学紀要』 9: 15-29。
1971 「近世和裁史の一考察(その三)——江戸後期の裁本について——」『東京家政学院大学紀要』 11: 45-65。

大竹この

- 1962 「帯の着くずれについての一考察——構成材料の摩擦係数及び柔軟性との関係——」『家政学雑誌』 13(3): 178-182。

大妻ユタカ

- 1928 「和服裁縫」『家庭科学大系22』 文化生活研究会。

尾崎芳太郎

- 1925 『用布節約裁方図解 新しい和服の裁縫』 実業之日本社。

志摩野 司

- 1932 『裁縫の原理と実際』 村田文泉閣。

篠田正作

- 1894 『裁縫字比まなび』 濱本伊三郎。

昭和女子大学被服学研究室

- 1971 『近代日本服装史』 昭和女子大学近代文化研究所。

鈴木キミ子

- 1976 「着くずれを考える」『衣生活研究』 25: 26-30。

シュトラッツ, C. H.

- 1971 『女体の人種美』(1902) 高山洋吉訳 刀江書店。

高橋貴四郎

- 1911 『新編裁縫学全書』 女子技芸教育会。

高月智志子

- 1972 「和服寸法設定の推移について(第1報)」『東京家政大学研究紀要』 12: 69-81。
1973 「和服寸法設定の推移について(第2報)」『東京家政大学研究紀要』 13: 107-117。
1975 「被服平面構成に関する諸問題(第1報)——大裁女物長着の衣紋について——」『東京家政大学研究紀要』 15: 91-98。

谷本きよ, 城所綾子

- 1976 「絹布裁要とその他の裁縫教本との比較について——主として実技的比較——」『山脇学園短期大学紀要』 14: 29-48。

牛込ちゑ

- 1971 『被服教育の変遷と発達』 家政教育社。

大丸 現代和服の変貌

渡辺芳苗, 佐伯はま子

1928 『裁縫の急所』 アルス。

山田令子, 杉山芳子

1971 「和服の着くずれに関する研究」『岐阜女子短期大学研究紀要』 20: 127-131。

山中典士

1972 『装道』 装道出版局。

吉田花美

1959 「和裁に関する諸問題（第1報）——和服寸法に関する一考察——」『家政学雑誌』 10 (4): 284-291。

吉村千鶴

1924 『裁縫科新教授法』 東京裁縫女学校出版部。